

あいづちに使用される「はい」と「うん」

—あらたまり度・待遇度から見た出現実態—

中島 悦子

1. はじめに

会話では、話し手は常に聞き手に自分の発話を聞いてもらいたいと意識し、聞き手のあいづちを期待する。特に親しい友人同士の会話では、あいづちを打つ聞き手の存在を強く意識して発話が行われることが多い。もし聞き手が話し手の発話を黙って聞いていれば、話し手を無視しているにとられかねない。そこで聞き手はあいづちを打って、きちんと聞いているという信号を送るのである。

そこで本稿では、あいづちとは「聞き手が話し手の発話を聞いているということを示す信号」とおおまかに規定する。従って奥津（1988）の応答詞の機能のうち「コメントに対する応答」はあいづちに含める。また小宮（1986）が、「自由意志に基づいて」なされるあいづちを「その応答が積極的な応答の求め、あるいはポーズのような消極的な求めに応じる形でなされた受け答えではないという意味である」として、あいづちから除外した終助詞「ネ」やポーズに対して応じた応答表現は、あいづちに含めた。しかし堀口（1988）、ザトラウスキー（1993）の「否定の信号」の「感謝、陳謝等を打ち消す」ものや、堀口（1988）、水谷（1984）の「言い換え」「補強型」はあいづちに含めない。

一般にあいづちには、「はい」「はあ」「ええ」「うん」「そう」「ほんと」「なるほど」「そうですね」「へー」「ほー」等の言語形式が含まれるが、頭の動きや笑い等の非言語行動も含める立場もある。本稿では「はい」「はあ」「ええ」「うん」「そう」（これらを「はい」系と呼ぶ）の肯定応答詞を対象として調査した。

表1はあいづちに使用される応答詞の出現数を自然談話資料に基づいて調

査したものである。なお、表1の数値では「はいはいはい」と重なった「はい」は一回と数えてある。また「いいえ」「いえ」「いや」「うん」（これらを「いいえ」系と呼ぶ）も僅少ではあるがあいづちとして出現しているのを、表1に示しておいた。調査資料は自然談話録音資料「職場における女性の話しことば」（1994）を使用した。

表1 あいづちに使用される応答詞の出現数

種 類 先 行 文	はい系						いいえ系					
	はい	はあ	ええ	うん	そう	計	いいえ	いえ	いや	ううん	計	総計
あいづち	407	44	248	1010	129	1838	1	9	31	3	44	1882
①叙述文	101	28	56	409	88	682	1	4	26	3	34	716
②発話途中挿入	94	8	99	503	33	737	0	0	0	0	0	737
③応 答	29	5	12	74	3	123	0	0	2	0	2	125
④電 話	183	3	81	24	5	296	0	5	3	0	8	304
応答詞 総計	580	58	339	1490	228	2695	5	28	88	24	145	2840

談話資料の総発話数11,421例中、応答詞の出現総数は2840例ある。そのうち、あいづちに使用される応答詞は1882例あり、応答詞総数比（応答詞の総数2840例に対する比率をいう）は66.2%と高率である。「はい」系が1838例、応答詞総数比64.7%、「いいえ」系が44例、応答詞総数比1.5%とあるように、あいづちは肯定の「はい」系を原則とする。第1位は非丁寧体の「うん」で、丁寧体の「はい」「はあ」「ええ」の合計数より多い。第2位は最丁寧体の「はい」である。そこで、出現率の高い「うん」と「はい」に焦点をあて、その出現要因を場面差、世代差、相手との性別関係、上下関係、親疎関係等のあらたまり度や待遇度に求めて次章で検証する。

2. あいづちに使用される「はい」と「うん」の出現要因

表2-1が示すように、あいづちの出現総数1882例中、「はい」が407例、あいづち率（あいづちの総数1882例に対する比率をいう）21.6%に対して、「うん」は1010例、あいづち率53.7%と圧倒的に「うん」が多い。

表 2-1 あいづちの「はい」「うん」の出現数

	場 面	世 代	性別関係	上下関係	親疎関係フォ	親疎関係インフォ	計
は い	フォ 370	若年 183	f → f 89	上 → 下 127	親親 52	親(親) 15	407
	インフォ 37	中高年 212	f → m 114	下 → 上 113	普通 95	不明 22	
		不明 12	m → f 58	同 → 同 65	疎疎 114		
			m → m 7	不明 102	不明 109		
			不明 139				
う ん	フォ 437	若年 480	f → f 558	上 → 下 434	親(親) 191	親(親) 232	1010
	インフォ 573	中高年 508	f → m 177	下 → 上 166	普通 101	普通 109	
		不明 22	m → f 99	同 → 同 245	疎 20	疎 28	
			m → m 16	不明 165	不明 125	不明 204	
			不明 160				
あいづち総数							1882

なお、表 2-1 にあるフォとは会議・打合せのフォーマル場面、インフォとは雑談のインフォーマル場面をいう。性別関係にある f → f とは女性から女性への発話をいう。上下関係にある上 → 下とは年齢が上の人から下の人に対する発話をいう。親疎関係はフォーマル場面とインフォーマル場面とに分けた。

「はい」と「うん」を場面別に見るとどうか。「うん」は非丁寧体であるから、当然あらたまり度の低いインフォーマル場面に多く使用され、あらたまり度の高いフォーマル場面では避けられると予想される。しかし実態は、フォーマル場面においては「うん」は437例、あいづち率23.2%、「はい」は370例、あいづち率19.6%とわずかの差であるが「うん」のほうが多い。インフォーマル場面では「うん」は573例、あいづち率30.4%、「はい」は37例、あいづち率1.9%と、当然のことながら「うん」の多用、「はい」の少用となっている。「うん」はあらたまり度に関係なく、最も多くあいづちに使われていることが分かる。

世代差では、「はい」「うん」ともに若年層よりも中高年層のほうに多く使われる傾向がある。性別関係では、「はい」は女性が男性に対する時に多く、他方「うん」は女性同士の対話のときに多い。(なお資料の性質上、性別関係は f → f、f → m の差にとどめる)。上下関係を見ると、「はい」は、年齢が上から下に対してでも下から上に対してでも差がなく、上下関係に左右されず用いられている。ただ同年齢同士では少ない。他方「うん」は年齢が下

から上に対してよりも、上から下に対して、また同年齢同士で多く用いられており、これは予想通りである。親疎関係では、「はい」がフォーマル場面で相手が非常に疎遠な間柄の時に多く使われているのに対し、「うん」はフォーマル・インフォーマル場面ともに親しい間柄の時に多く使われる傾向が見られる。

以下、表1に示したあいづちの種類に従って、「はい」と「うん」の出現頻度の要因を検証する。

2.1 叙述文に対するあいづちの「はい」と「うん」の出現要因

表2-2 叙述文に対するあいづちの「はい」「うん」の出現数

	場 面	世 代	性別関係	上下関係	親疎関係 _{フォ}	親疎関係 _{インフォ}	計
はい	フォ 87 インフォ 14	若年 37	f → f 44	上 → 下 49	親(親) 24	親(親) 8	101
		中高年 60	f → m 27	下 → 上 38	普通 18	親(親) 6	
		不明 4	m → f 25	同 → 同 4	疎(疎) 29	不明 6	
			m → m 1	不明 10	不明 16		
			不明 4				
うん	フォ 153 インフォ 256	若年 233	f → f 197	上 → 下 137	親(親) 72	親(親) 90	409
		中高年 164	f → m 69	下 → 上 64	普通 38	普通 38	
		不明 12	m → f 44	同 → 同 111	疎 13	疎 4	
			m → m 4	不明 97	不明 30	不明 124	
			不明 95				
あいづち総数							1882

叙述文に対するあいづちとは、以下の例(3)のように、先行発話の文末が「だ」で終わった文、即ち完結文のあとに置かれるものや、例(1)(2)(4)のように、先行発話が「て」「けど」「から」で終わっている、いわゆる未完結文のあとに置かれるものをいう。日本語の発話では実際は「て」「けど」「から」等で終わる文が圧倒的に多い。そこで未完結文も叙述文に含めた。

叙述文に対するあいづちを見ると、「はい」が101例、あいづち率5.3%、「うん」が409例、あいづち率21.7%と「うん」のほうが4倍も高い。場面差では、インフォーマル場面においては「うん」は「はい」より18倍も多く、「はい」が非常に少ない。またフォーマル場面においても「うん」のほうが「はい」より1.7倍も多い。あらたまり度に関係なく、叙述文に対するあいづちには「うん」が多用されていることが分かる。ただし「はい」だけで見れば、

フォーマル場面での使用が圧倒的に多い。世代差では、「はい」は中高年層に多く、「うん」は若年層に多い。性別関係では、「はい」「うん」とともに女性同士の時に多く使用される傾向があるが、特に「うん」にその傾向が著しい。上下関係では、「はい」は年齢が上から下でも下から上でもあまり差がない。しかし同年齢同士では「はい」は少ない。他方「うん」では上から下の関係、または同年齢の関係の時に多く用いられるようで、下から上の関係では少ない。「はい」は同年齢同士の時、「うん」は下から上に対する時にはその使用が避けられる傾向がある。親疎関係においては、フォーマル場面では「はい」は相手が疎の関係にある時に最も多い。「うん」はフォーマル・インフォーマル場面ともに親しい関係の時に用いられ、疎の関係の時には非常に少ない。

- (1) きょうは←照明も★音も全部入れてやろうと思って。 [08I・30m→多数・打・*]
→はい、はい。← [08A・50f→08M・40f・打・親]
→全部の子じゃなくても←、(ええ inf(女))鉄琴だけの子とか。
[08M・40f→08A・50f・打・親]
はい。 [08A・50f→08M・40f・打・親]
- (2) 今日、ぼくは電車で来たんですけど。 [07B・30m→07A・40f・雑・親]
はい。 [07A・40f→07B・30m・雑・親]
- (3) それはいいん★だよ。 [03B・40m→03A・30f・打・普]
→うん←、うん。 [03A・30f→03B・40m・打・普]
- (4) →食事どきに←ちゃんと食べてますから←。 [12D・30f→12A・50f・打・親親]
うんうんうん。 [12A・50f→12D・30f・打・親親]

2.2 発話途中挿入のあいづちの「はい」と「うん」の出現要因

ものである。この発話途中に打たれるあいづちは597例、あいづち率31.7%を示しており、叙述文のあとに打たれるあいづち（510例、あいづち率27.1%）よりも、出現率が高い。つまり日本人は相手の話を聞いている時に話が終わらなくてもその途中であいづちを打つことが非常に多いのである。

表 2-3 発話途中挿入のあいづちの「はい」「うん」の出現数

	場 面	世 代	性別関係	上下関係	親疎関係 _{フォ}	親疎関係 _{インフォ}	計
は い	フォ 92 インフォ 2	若年 30	f → f 40	上 → 下 42	親(親) 8	親 2	94
		中高年 57	f → m 24	下 → 上 33	普通 23		
		不明 7	m → f 24	同 → 同 4	疎(疎) 24		
			m → m 4	不明 15	不明 37		
			不明 2				
う ん	フォ 230 インフォ 273	若年 202	f → f 312	上 → 下 255	親(親) 89	親(親) 123	503
		中高年 293	f → m 91	下 → 上 90	普通 50	普通 64	
		不明 8	m → f 51	同 → 同 107	疎 7	疎 24	
			m → m 11	不明 51	不明 84	不明 62	
			不明 38				
あいづち総数							1882

発話の途中に挿入されるあいづちは、「はい」（94例、あいづち率4.9%）より「うん」（503例、あいづち率26.7%）のほうがはるかに多い。場面差では、フォーマル場面でも「うん」（230例、あいづち率12.2%）のほうが「はい」（92例、あいづち率4.8%）より高い。「うん」はフォーマル・インフォーマル場面ともに高率で使用されているが、「はい」は大部分がフォーマル場面での使用である。ここでも「うん」はあらたまり度に関係なく用いられていることが分かる。世代差では、「はい」「うん」とともに中高年層の使用が若年層をやや上回っている。性別関係では、「はい」「うん」とともに女性同士の時の使用が多いが、「うん」は際立って女性同士の対話に多用されている。上下関係では、「はい」は同年齢同士の時には使用が少ない。しかし年齢が上から下でも、下から上でもその使用にあまり差がない。他方「うん」は圧倒的に年齢が上から下の関係の時に多用されており、下から上の関係の時には少ない。また「はい」と違い、同年齢の人同士の時にも多い。親疎関係では、「はい」はフォーマル場面では疎または普通の関係の時に使用され、インフォーマル場面では殆ど使用されていない。他方「うん」はフォーマル・

インフォーマル場面とも親しい関係の時に多用され、疎遠の関係の時は少ない。「はい」は疎遠の関係の時に、「うん」は親しい関係の時にと使い分けられていることが分かる。

- (5) それで、実はあの一(はい inf(女))、お願いとゆうのは(ええ、はいはい inf(女))
 ですね、えーと、係りの者がどの程度お話ししたかわからないんですが(あん、
 はいはい inf(女))、実は今度こうゆう、あの一ですね(はい inf(女))、えー介護
 休業制度に関する専門家会合とゆうの(はい、はい inf(女))をやりたいと思って
 まして。 [04M・40f→04A・50f・打・*]
- (6) その時に、その企業側から見たら、(うんうん inf(女))労働者がやってきて、え
 ー、実は、(うん inf(女))もう うちのおばあちゃんが、(うん inf(女))もう、
 動けないんで、えー、その介護しなきゃいけないんで、(うん inf(女))お休みく
 ださいと、(うん inf(女))企業ゆわれても、えー(そうね inf(女))どうしようか
 と、(うん inf(女))ほんとにそうなの(うん inf(女))かとゆう話になってきた時
 ですね。 [04M・40f→04A・50f・打・*]

2.3 応答に対するあいづちの「はい」と「うん」の出現要因

表 2-4 応答に対するあいづちの「はい」「うん」の出現数

	場 面	世 代	性別関係	上下関係	親疎関係 _{フォ}	親疎関係 _{インフォ}	計
は い	フォ 23	若年 16	f→f 3	上→下 15	親(親) 3	親 3	29
	インフォ 6	中高年 12	f→m 14	下→上 11	普通 12	不明 3	
		不明 1	m→f 9	同→同 1	疎(疎) 5		
			m→m 2	不明 2	不明 3		
			不明 1				
う ん	フォ 33	若年 35	f→f 38	上→下 31	親(親) 13	親(親) 16	74
	インフォ 41	中高年 37	f→m 17	下→上 11	普通 12	普通 7	
		不明 2	m→f 4	同→同 18	不明 8	不明 18	
			m→m 1	不明 14			
			不明 14				
あいづち総数							1882

例(7)(8)のようにあいづちの「はい」「うん」は、先行発話が肯定応答詞「はい」や「うん」のあとに置かれている。つまり聞き手が話し手の肯定の応答に対してあいづちを打ったのである。これは単に相手の話を聞いているという信号だけではなく、さらに相手の肯定の応答に自分も同意だという

信号を送ったものである。

「はい」と「うん」の出現頻度では、「はい」は29例、あいづち率1.5%、「うん」は74例、あいづち率3.9%と、「うん」のほうが2倍以上も多い。

また資料を調べると、先行の応答「はい」のあとに打たれるあいづちは「はい」が多く、先行の応答「うん」あるいは「そう」のあとに打たれるあいづちでは「うん」が多いという使い分けがされている。

場面差では、「はい」がフォーマル場面のほうに多いのに対して、「うん」はフォーマル・インフォーマル場面ともに使われ、あらたまり度に関係なくその使用が一般的になっていることが分かる。世代差では、「はい」「うん」ともに若年にも中高年にも使用されている。性別関係では、「はい」は女性が男性に対する時に、「うん」は女性同士の時にという使い分けがされている。上下関係では、「はい」は同年齢同士では殆ど使われていないのに対して、「うん」は同年齢同士または上から下の関係の時に使われるという傾向を示す。親疎関係では、「はい」は相手が普通の関係の人によく使われ、「うん」は相手が親しい関係の人に多用されている。

- | | |
|------------------|-----------------------|
| (7) えと、大阪府の池田です。 | [10E・20f→10D・40m・打・＊] |
| 池田。 | [10D・40m→10E・20f・打・＊] |
| はい。 | [10E・20f→10D・40m・打・＊] |
| <u>はい。</u> | [10D・40m→10E・20f・打・＊] |
| (8) 遅刻↑ | [13A・20f→13D・20f・雑・普] |
| うん。 | [13D・20f→13A・20f・雑・普] |
| <u>うん。</u> | [13A・20f→13D・20f・雑・普] |

2.4 電話の相手発話に対するあいづちの「はい」と「うん」の出現要因

これは電話中に相手の発話に対してあいづちを打ったものである。注目すべきは電話では圧倒的に「はい」が多用されており、「うん」が非常に少ないことである。場面差では、「はい」はその使用の大部分がフォーマル場面に集中し、また「うん」の使用もフォーマル場面に多い。世代差では、「はい」「うん」ともに若年層にも中高年層にも使われている。資料では相手が

特定できず、相手との関係が不明な場合が多いので、性別関係や上下関係、親疎関係等には触れないでおく。

表 2-5 電話の相手発話に対するあいづちの「はい」「うん」の出現数

	場 面	世 代	性別関係	上下関係	親疎関係 フ	親疎関係 インフ	計
は い	フ 168	若年 100	$f \rightarrow f$ 2	上 $\rightarrow$ 下 21	親 17	親親 2	183
	インフ 15	中高年 83	$f \rightarrow m$ 49	下 $\rightarrow$ 上 31	普通 42	不明 13	
			不明 132	同 $\rightarrow$ 同 56	疎疎 56		
				不明 75	不明 53		
う ん	フ 21	若年 10	$f \rightarrow f$ 11	上 $\rightarrow$ 下 11	親(親) 17	親親 3	24
	インフ 3	中高年 14	不明 13	下 $\rightarrow$ 上 1	普通 1		
				同 $\rightarrow$ 同 9	不明 3		
				不明 3			
あいづち総数							1882

(9) えーと、編集の[名字]ですけれども、[名字]さんおいでになりますか↑

[06A・40f→06L・40m・打電話・普]

はい。〈問〉

[06A・40f→06L・40m・打電話・普]

(10) ん、そうなんですよ↑

[11A・20f→11C・20f・打電話・親]

ん、えーと。

[11A・20f→11C・20f・打電話・親]

え。

[11A・20f→11C・20f・打電話・親]

え。

[11A・20f→11C・20f・打電話・親]

うん。

[11A・20f→11C・20f・打電話・親]

えっ、そうなんですかー。

[11A・20f→11C・20f・打電話・親]

はい。

[11A・20f→11C・20f・打電話・親]

ええ。

[11A・20f→11C・20f・打電話・親]

3. おわりに

あいづちの「はい」と「うん」の出現頻度は、「はい」はあいづち率が21.6%、「うん」はあいづち率が53.7%と、「うん」のほうが2倍以上も多い。

「はい」と「うん」の出現頻度の要因をあらたまり度と待遇度から見ると、「うん」はインフォーマル場面だけでなくフォーマル場面にも多用され、その出現要因はあらたまり度に関係ない。世代差では、全体的には「はい」「うん」ともに中高年層の使用のほうが若年層をやや上回る傾向を示す。性別関

係では、総じて「はい」は女性が男性に対する時に、「うん」は女性同士の対話の時に多用される傾向がある。上下関係では、「はい」は同年齢同士の時、「うん」は年齢が下から上の人に対しては使用が避けられる傾向が見られる。親疎関係においては、「はい」はフォーマル場面では疎遠の關係の時に、「うん」はフォーマル・インフォーマル場面とも親しい關係の時に多用される傾向があるといえる。

参考・引用文献

- 奥津敬一郎 1988 「「はい」と「いいえ」の機能」井上和子編『日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究』研究報告(4)昭和62年度科学研究費補助金特別推進研究(1)
- 1989 「応答詞「はい」と「いいえ」の機能」『日本語学』8月号 明治書院
- 現代日本語研究会編 1994 『職場における女性の話しことば—自然談話録音資料に基づいて—』財団法人東京女性財団1993年度助成研究報告書
- 1997 『女性の話しことば・職場編』ひつじ書房
- 小宮千鶴子 1986 「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』第3号 大東文化大学語学教育研究所
- ザトラウスキー・ポリー 1993 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 堀口純子 1988 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号
- 1997 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- メイナード・K・泉子 1993 『会話分析』くろしお出版
- 水谷信子 1983 「あいづちと応答」『話しことばの表現』筑摩書房
- 1984 「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古稀記念論文集』第2巻言語学編 三省堂

(なかじま えつこ)